１３．リラ修道院（Рилскиятманастир）

コプリフシティツァからリラ修道院へ

11月23日は、6時25分に宿を出た。前日に二日分の宿泊費90Lv(4,943円)を支払い、早出するので朝食はいらないと告げてある。ディミタール情報によれば、ソフィアからリラ修道院へ行く直通バスは一日一便しかなく、オフチャ・クペル・バスステーションから10時20分発だ。これに間に合わせるためには、コプリフシティツァ発6時45分を利用することになる。

部屋のドア鍵穴に鍵を差したままにして、玄関は施錠せずに宿を離れる。中庭から街路に出る潜り戸も施錠されていなかった。治安には問題のないところなのだろう。辺りはまだ真っ暗で、街灯も少ないけれど、歩きにくいほどではない。5分ほどでバスステーションに着く。定員15人くらいのマイクロバスがエンジンをかけたまま停車していた。乗車口へ行くと、前の暗がりに立っていたオバサンが、「プロヴディフ？」と訊く。このバスは6時半発のプロヴディフ行きで、ソフィア行きはしばらく待てと云われた。

間もなくマイクロバスは走り去り、入れ替わるように大型バスがやってきた。周囲の暗闇に佇んでいた10人くらいが乗車する。運転手が床下収納庫を開ける様子もなく、乗客も少なかったのでキャリーカートに着けたままのカバンを持って最後に乗り込む。ソフィアまで約１１０キロの運賃が11Lv(604円)だった。後部右側の窓際に席を占める。

ソフィアまでは2時間半かかる予定で、腹具合に不安があったから（「突然の下痢」などに優れた効果を発揮することが売り物の）ストッパを1錠服用した。それほど信頼している薬ではないが、2003年に発売開始し、未だに売れているのだから飲まないよりはましだろう。

照明が点されたので車内を見回したが、昨日の日本人女性は乗車していないようだ。ゆっくり昼頃のバスでソフィアに向かう可能性もあるが、雰囲気からするとそのようなのんびり旅ではなさそうだ。やはり夕刻のバスで立ち去ったのだろう。朝9時にソフィアを発ち、11時半にコプリフシティツァで、午後5時に帰りのバスに乗り、7時半ソフィア帰着みたいな具合か。何とも忙しないと感じるけれど、この程度が個人旅行でも普通なのだろう。団体はもっと忙しない。

定刻に発車すると、一昨日ディミタールと来た道を逆に辿り、6号線と合流する頃になると辺りはすっかり明けていた。発車後20分ほどで隣町のアントンに入り、街道を離れて街中心部で停車する。20人以上が乗車した。

通勤、通学らしい人や買い物へ出かけるらしい主婦など、雑多な乗客だ。通路も乗客で立錐の余地もないほどの混雑となる。慌てて通路側座席のところに置いていたキャリーカート付きカバンを引き寄せて、一人分の空席を作ったものの、カバンがそこに坐った他人に迷惑を掛けることは明白で、非常に肩身の狭い思いをした。

ちなみにこの路線を（高速）長距離バスと勝手に思い込んでいたが、どうやら（長距離）路線バス

通路も乗客で一杯（7時22分）。この直後に若干空いたが、それでも空席なしだった。

"ВЕЛИР СК ТРАНС"
ЕООД ТЕЛ.9837608
КИРИЛ И МЕТОДИЙ 42
ДЗ.ИЛИЯН КИРИЛОВ
НАДЕЖДА 2 БЛ.272
БУЛСТ:
130407615
ДАН.№: 5408026807
НАЧ.ТАКСА 0.70 ← 1.基本料金
Т1 ЦЕНА 1.30 ← 2.キロ単価
КМ: 8.544 11.11 ← 3.距離と計算結果
ЦЕНА ПРЕСТОЙ 0.65 ← 4.渋滞加算単価
ПРЕСТОЙ 4:41МИН ← 5.渋滞時間(分:秒)
3.04 ← 6.渋滞加算料金
ОБЩА СУМА:
14.85 ← 1.+3.+6.=料金
4141 23-11-11 09:31
И.КИРИЛОВ
CA3527BC

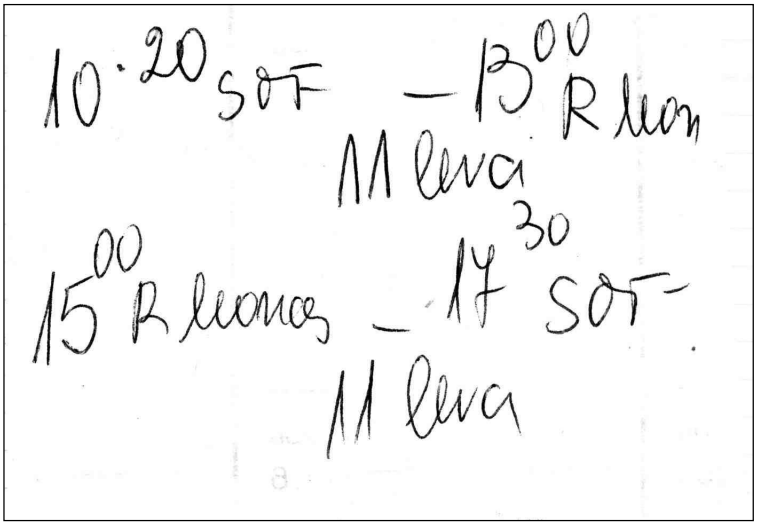
ソフィアのタクシーレシート。バチコヴォまで利用した際(P.120)と較べると、キロ単価がちょうど2倍、渋滞加算単価が3倍以上になっている。

で、ソフィアまで利用する乗客は少数派であり、比較的短距離利用者が主流らしい。

超満員状態は次の街で高校生風の連中が一斉に下車したため幾分緩和された。しかしそれでも空席なしの状況は続き、カバンの迷惑を気に病みつつ悶々とソフィアへ向かうのだった。

人家などが増え、大都会への接近を感じさせる。間もなく見覚えのあるマリア・ルイザ通りに入り、すぐに終点である中央駅前のバスターミナルに停車した。リラ修道院までのちょうど中間点に達したという感じだ。

次に乗るバスはオフチャ・クペル・バスステーション発だが、中央駅からは7キロほど離れている。英ガイドによればバスの60番かトラムの5番を利用すれば良いとのことだが、タクシーでも4Lv(220円)程度らしい。中央駅周辺は雲助タクシーが多いらしいので迷ったものの、利便性の誘惑に負けた。客待ちしている一台に近付き、オフチャ・クペル・バスステーションまでの料金を訊くと、せせら笑うようにして、「メーターだ。」と云う。感じの悪いオヤジだが、云うことに不当な点はないので乗車した。

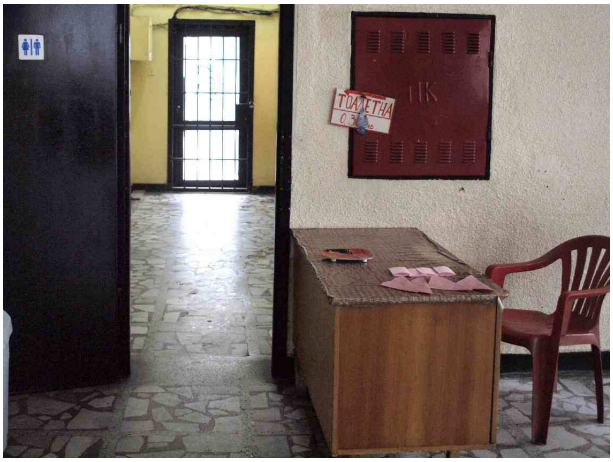

10·20 SOF — 13^00 R lion
11 leva
15^00 R leonas — 17^30 SOF
11 leva

切符売り場のオバサンがくれたメモ。原寸大)。10時20分ソフィア発13時リラ着。11Lv。15時リラ発17時30分ソフィア着。11Lv.

ソフィアの街を南下し、右折してトラムの走る街路を南西に直進する。予想よりかなり遠いが、回り道などして不正に距離を稼いでいる様子はない。10分強で大型バス数台が駐車している、いかにもバスステーションらしいところに停車した。メーターは14.85Lv(816円)を示している。

英ガイドの記載に較べれば4倍近いけれど、メーターがそうならば異邦人旅行者が異議を申し立てることなど不可能だ。15Lv支払った。レシートをよこしたので、執筆にあたり調べ直したところ、要するに単価が高いのだ。車輌は高級とは全く無縁の中型・中古のライトバンタイプだったと記憶する。結局運転手がいかなる不正を行ったのか良く判らないが、金額的に大したことがないのが救いだ。

駐車場と街道の間に平屋の建物がある。中は待合室と、切符売り場、売店、トイレなどだった。切符売り場窓口で Rila Monastery と書き込んでおいたメモホルダーを示すと、傍らのメモ用紙を1枚取り、発車時刻その他を手早く書き込み、切符は車内で買えばよいと云う。乗り場を訊くと、席を立って脇のドアから待合室に出て、先に立って駐車場の方へ誘導する。場内を一瞥して、「10時に来るはずだから、その時刻になったら改めて教えてあげる。」と親切この上ない。忙しくないせいもあるのだろうが、ブルガリア人の性癖なのかもしれない。



待合室の有料トイレ。

スタンドで売っていたハンバーガー。ハンバーグではなくキョフテサンドと呼ぶのが適切かも。

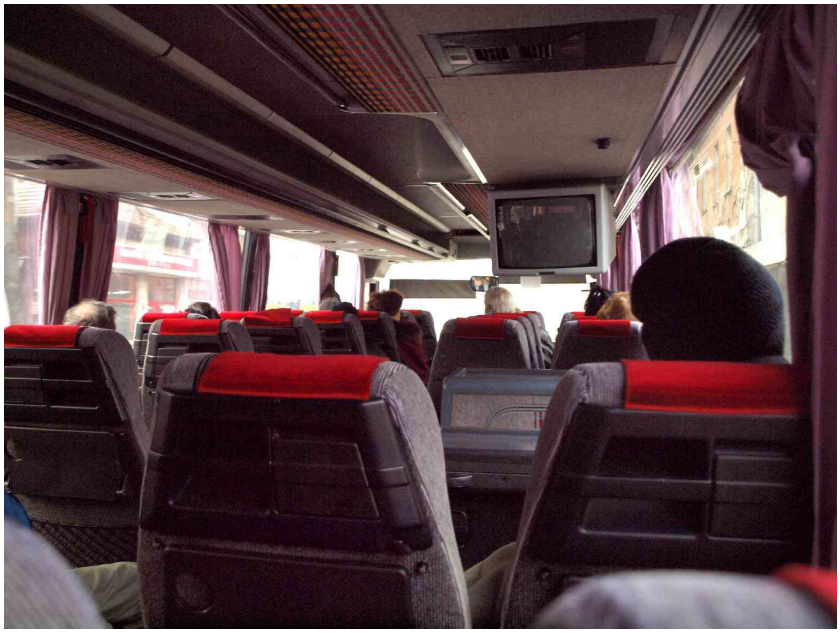
まだリラ修道院までの中間点とはいえ、懸念されていたことはほぼなくなったので、緊張が緩む。まずトイレへ。有料(0.3Lv(16円))で、一般的に有料の方が管理状態が良いからこの程度の料金ならば歓迎だ。清掃兼料金徴収のオバサンは席を外していたが、ちょうど小銭の持ち合わせがあったので置いてある料金皿へ投げ込んだ。

用を足すと朝食抜きで来たことが念頭に登り、何か食べたくなった。待合室の売店にもラップされてサンドイッチなどがあるが、表へ出ると焼きたてハンバーガーのスタンドがあった。目の前で紫煙を上げて肉を焼いているのを見れば、いやが上にも食欲をそそられる。

値段を控え忘れたが、2Lv(110円)ぐらいだったと思う。実際食べると美味くない。辺りには通学途中らしい高校生風の連中が大勢いて同じようなファストフード飲み食いしている。

朝食を済ませ待合室に戻る。暇潰しに発車時刻表を仔細に眺めた。数十便がこのステーションから発車するが、10時20分発は一便しかないので簡単に見付かった。この時刻表はキリル文字とアルファベットの併記なので、Rila を確かめてから Рил のパターンを頭に刻む。できればバスの前面表示を読み取りたい。

10時10分に入場してきたバスのフロントグラス内側にくだんのパターンを見付けた。待合室に荷物を取りに戻り、先ほどのオバサンに確認すると頷いてくれる。礼を云って待合室からバスへ。修道院まで105キロの料金は、オバサンに教えられた通り11Lv(604円)だ。10Lvと1Lvの切符を渡される。



リラ行き長距離路線バスの車内。

ほぼ定刻に出発。ソフィア郊外を抜けると、大規模な農地も見えるがどちらかというと荒涼とした風景が多い。これまで旅してきた西部や中央部に較べると、農業に不適な何かがあるのだろうか。約1時間のドライブでドゥプニツァの街に着く。

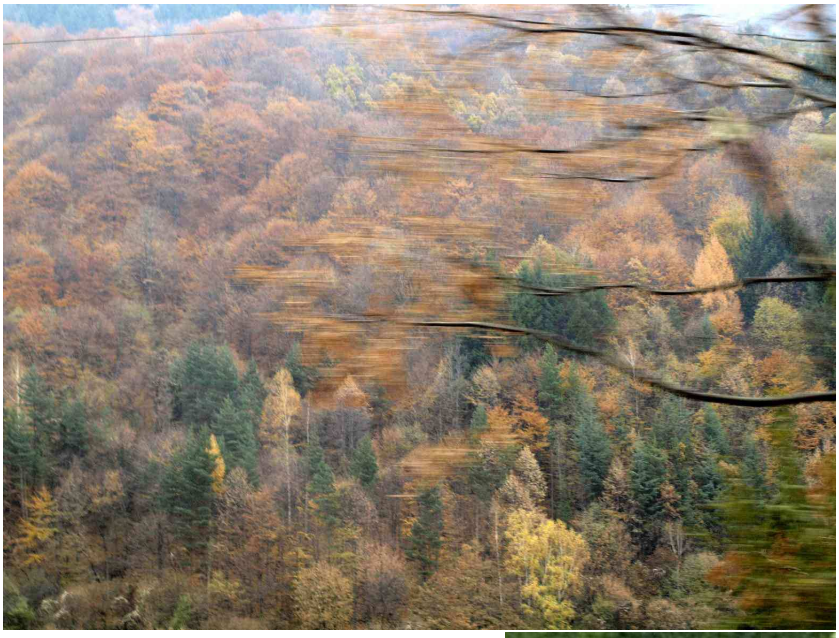
この街のちょっと手前で、荒れ地を簡単に整地しフェンスを設けたところに多数の(多分)中古車が駐まっている。中古車展示販売場と見

ドゥプニツァの手前に中古車展示場(?)があった。

リラのバスステーション。バスフロントグラスの内側にはРила（リラ）などが書かれた札が置かれている。

受けたが、隣接して少なくとも4業者が商売しているようだ。ソフィアからは70キロ以上離れているし、ドゥプニツァは人口4万強の小さな街なので、なぜこのような状況が成立するのか不思議だった。

ドゥプニツァ駅前で数人の乗降があり、再び郊外の単調な景観を横切って進む。50分ほどで村に入り、バスステーションで停車した。運転手はブルガリア語で乗客に何か告げると下車し立ち去ってしまう。乗客も三々五々といった感じで下車し始めた。



車窓風景。

事情がわからないままともかくトイレを済ませる。バスはドアを開けたままで停車し、運転席脇の切符販売用小銭などはそのまま放置されている。持ち去られる心配などないと云うことか。乗客の中にただ一人いた旅行者風の青年と言葉を交わしたが、彼もさっぱり状況が把握できないようだ。ついでに国を尋ねると、フランス人だった。

バス周辺にとどまっていたオバサンが英語を話すと判り、プロヴディフで購入した道路地図を持出し、現在位置を教えて貰う。リラ修道院から22キロ西方にあるリラ村だった。ソフィアからの直通バスを利用しない場合は、此処が修道院へのバス中継地点となる。

リラ修道院の衛星写真。変形した菱形が修道院で北（上側）に接してレストランや商店、少し離れて北東にあるのがホテル。

半時間弱で再び三々五々乗客が戻り始め、運転手も姿を現す。間もなくマイクロバスが到着し、どうやらこれと連絡するための待ち時間だったようだ。しかし結局乗り継ぐ客はないまま走り出す。村の建物密集地帯を抜けると、すぐに渓流沿いの山道になった。センターラインのない相互一車線道路は、交通量の少ない今だと問題ないが、繁忙期にはかなり渋滞しそうだ。しかし渓流や紅葉の始まった山腹を見ながら野趣に溢れたこんな道は、路線バスに乗っていても楽しむことができた。

リラ修道院の西門。

渓流から離れ、急な坂道をしばらく登ると広場に出た。広場に隣接して修道院とその西門が見える。1時10分だった。乗客の中に旅人は私とフランス人だけだが、他の連中も皆、西門から修道院に吸い込まれ散らばっていった。

リラ（リルスキ）修道院

リラ修道院はブルガリアにおいて最大でありもっとも著名な修道院である。10世紀に創建され宗教的意味だけではなく、文化的、歴史的、建築的にも重要で1983年にユネスコの世界遺産にも登録された。

当初はリラ出身の聖イヴァン・リルスキの弟子達が、山に籠もる彼に教えを請うために訪れた傍ら、建設したとされている。第二ブルガリア帝国時代には歴代ツァール（国王）の手篤い庇護を受け大きく発展した。

しかしブルガリアがオスマン帝国支配下となると、この修道院も破壊や収奪を受けることになる。その後15世紀末には、ロシア正教会の支援で改築が施された。

1833年1月には大火事に見舞われ、中庭のフレリョ塔を除き、ほとんどの建物が焼失する。しかしこの時期は民族復興期でもあったので、ブルガリアの精神的な中核ともいえる修道院に対し、全土から多額な寄付や労働が寄進された。その結果、現存修道院の建物は、ほとんどが1870年までに再建されたものだ。

左に聖母教会。奥の右手に見える階段の後ろが宿泊窓口。

リラ修道院の宿坊

リラでの宿は未定で、英ガイド情報では修道院に泊まれそうだが、バチコヴォの例もあるし、安心はできない。ともかく修道院のどこへ行けばよいのか思案していると、なぜ判ったのか先ほどの英語を話すオバサンが宿泊窓口の場所を教えてくれる。中庭を横切った北東部らしい。石畳は歩くならばともかくキャリーカートを引っ張って行くには難儀だったが、ともかく窓口を訪ねた。しかしドアはロックされている。

すぐ隣接して博物館があり、此処にいた女性の係員は幸い英語も話す。宿泊窓口について尋ねると、「2時になれば戻るだろう。」とのことだ。昼食を済ませてから来ればちょうど良さそうなので、近隣で食事できる場所を訊くと、窓から見えるホテルとレストランを教えてくれた。

相変わらず歩きにくい石畳を行き、東門から外へ出る。すぐ外も石畳だったが、それはすぐ途切れ石塊のごろごろした石畳以上にキャリーカートには不向きな路面になる。ホテルへ行くには水平の道と下り坂があり、1階に正面玄関があるものと思い、距離は50メートルばかりだが苦労して坂を下りた。しかしあったのは裏口で、カバンごとカートを抱えて4階まで登る羽目になった。

ようやくレストランの所在を示すサインを見付け、それに従い突き当たったドアを開けると、照明を落とした室内には男が二人いてテーブルを挟んでバックギャモンをやっていた。二人ともこちらを向き、当惑したような表情が浮かぶ。レストランが営業していないことはほぼ間違いないものの、どこか他所で食事できる可能性も含め、「昼食を摂れるか？」英語で尋ねた。

二人とも英語を喋らないらしく膠着状態が続いたが、若い方が矢庭に立ち上がると、ちょっと待てといった仕草をしてから足早に室外へ出て行った。すぐに戻ってきた彼が伴ったのは、同じフロアにあるホテルのフロント嬢だった。彼女が、ホテルは営業しているがレストランは休みで、食事したければ修道院東門との間にあるレストラン・リラが最寄りだと教えてくれた。

再びカートを苦労しながら引っ張ってレストランの前まで辿り着いた。随分無駄が多い経路を辿ったように感じたが、バスが到着してから20分間のことだ。ところが先ほどのフランス青年が食堂のテラス席に設けられた手摺りに肘をつき、所在なさそうに渓流を見下ろしていた。

食堂リラの外観。

上：ショプスカサラダ。下：、バンスコ鶏のロースト。

一声挨拶を交わし、店に入った。後で、「独り飯を食うのも飽きたから、『奢るから』と彼を誘えば良かった。」と思いついたが、既に姿を消していた。

入ってすぐの部屋はバーカウンターもあり、食事よりもコーヒーや酒を飲みながら過ごすような感じで、地元らしい数人の男女がいた。奥の部屋は4人掛けと6人掛けのテーブルで合わせて30席ほどあるが、先客はいない。

奥に薪暖炉が設けられていて、炎を眺めながらの食事にも惹かれたが、結局窓際のテーブルに着いた。英文併記メニューから、(ポモリエ産の)赤ワインとショプスカサラダはすぐに決まったが、メインを何にするか迷う。結局どのような料理かは判らないまま、バンスコ鶏のローストを選んだ。わざわざバンスコの名を冠しているのは、名古屋コーチンや比内地鶏のように鶏の名産地なのだろうか？

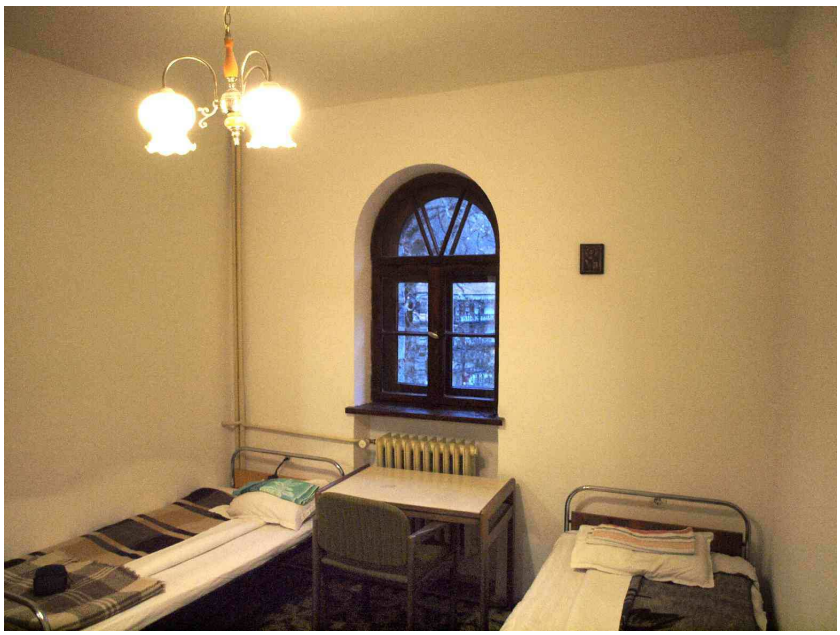
ショプスカサラダはごく平凡な出来具合だった。これでワインを飲んでいると、10分遅れでバンスコ鶏が運ばれてきた。もっと時間を要すると思い込んでいたから、ちょっと驚く。下拵えが済んでいて、鶏の肉なので火の通りが早いのだろうか。ソースや焼き具合に格別のものはないが、ジューシーでプリプリした歯応えは美味かった。それ故に歯の状態が悪かったことを残念に思う。

ブルガリア料理にしては量が少なく、私にはちょうど良かったようで、最後まで楽に食べきることができた。ミルクコーヒーで終わりにし、勘定はワイン1本10Lv(549円)、サラダ4.5Lv(247円)、パン0.4Lv(22円)、鶏8Lv(439円)、コーヒー1Lv(55円)、ミルク0.5Lv(27円)だった。

宿泊窓口を再訪するが、相変わらずドアはロックされてる。仕方がないので博物館の受付に相談すると、「対応できない。」といいながらも携帯を掛けてどこかに問い合わせたり、けんもほろろではないのでもう少し粘ってみた。その結果なのか、奥からもう少しものの判ったオバサンが出てきた。「多分教会の中にいるから、そちらを探せばよい。荷物は博物館の前に放置しても誰も持っていかない。」とのことだ。念のためカードに修道士の名前を書いて貰った。

いざ聖母教会に向かって10歩ほど行ったとき修道士が戻ってくる。英語はほとんど通じないが、それでもトイレ、シャワー付きの部屋に泊まりたいことは伝わり、部屋を下見させて貰うことができた。2階にあるその部屋は簡素でシャワーなどの設備も古いけれど、宿坊らしくて良い。

修道士のもとへ戻り二泊したい旨を伝えて、パスポートと料金60Lv(3,295円)を差し出す。彼はパスポート記載事項から宿泊票らしいものを作製し、その控えと領収書の2枚、鍵を渡してくれた。



宿坊で泊まった部屋。

荷物を運び上げ部屋で寛ぐ。修道院の一角に泊まるのは2003年1月にスペインのグアダルーペ以来だ。奇しくも同じ世界遺産に登録されている修道院だった。

清潔だけれど質素な部屋に身を置いて、しばらくすると満足感がじわりと湧き上がってきた。何に由来するのだろうか？キリスト教徒でなく、東方正教にはもっと馴染みがないから、場の宗教的意味に感銘を受けているわけではない。

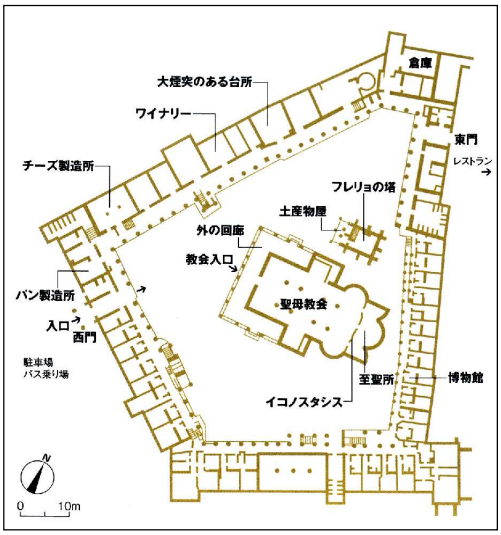
しかし場が大切なことは確かなようだ。此処で千年もの間、数多くの人々が祈りを捧げてきたこと。そして今いるこの建物も（内装は別だが）、百数十年の歴史がある。そこに宿泊して時を過ごすにともない、漂っている空気と幾分なりとも同化して行く感覚が好ましい。グアダルーペでも似たようなものだったと思う。

この日は早朝から移動に関する緊張、その後は果たして宿坊に泊まれるかの懸念で神経をささくれさせていたが、宿坊の部屋で静謐に包まれてしばし過ごすことで沈静化された。急ぐ必要は無いけれど、ひとまず修道院を一通り見物しよう。カメラだけを持って部屋を出た。

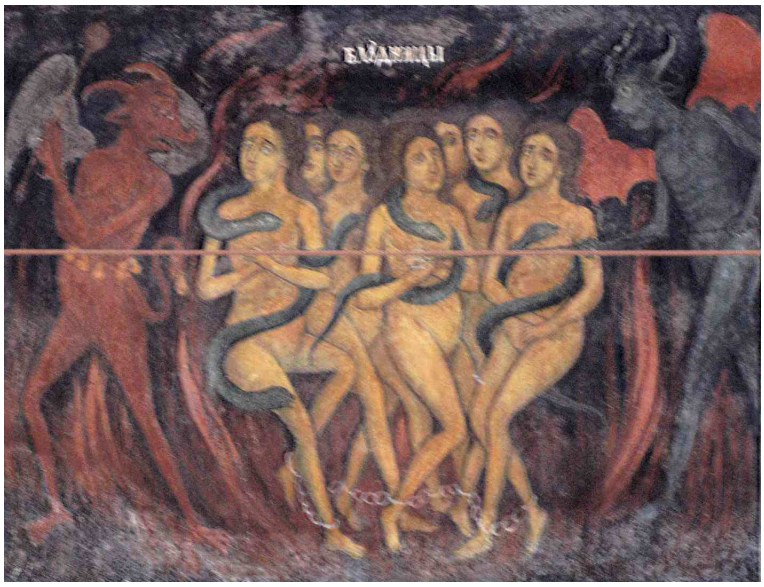
手始めに水平移動する。外壁を兼ねた修道院の建物はいびつな菱形で、四辺のほとんど総てが内側に手摺りのある回廊を形作っている。中庭とそのほぼ中心にある聖母教会を見ながら、北東辺を突き当たりまで行く。折れ曲がって南東辺にある階段で地上へ降りた。階段の登り口には、キリル文字と英文が併記された札が掲示され、英文を読むと、「修道院居住階には立入禁止」で、制止を意味する紐が一本通行を妨げている。簡単に取り外せるようになっているので、関係者や宿泊者は自ら外して通行後また元に戻す。

石畳の中庭を横切り、聖母教会へ。教会の前面と側面がアーチとドームで回廊をなし、その壁面はほとんどが聖書に関連した宗教画で埋め尽くされている。天井に近いほど、キリストや聖母

右上：2階の回廊。他は総て聖母教会フレスコ画。



リラ修道院平面図（旅名人ブックスより）。


悪魔の誘惑図（？）残念ながらぶれているのは低速（1/6秒）シャッターのせいか、はたまた興奮して手が震えたか。

マリア、大天使などの絵になるが、下の方にある悪魔の顔の方が面白いし、悪魔の誘惑に負けた様子を描いたのか、全裸の女性が蛇に巻き付かれ、悪魔に囲まれている図などは、アブナイ感じが何ともいえない。

回廊のフレスコ画を先に見たのは、教会内での撮影が禁止されているためでもあったが、やはりイコノスタシスを初めとする内部のあれこれを無視するわけにはいかない。ドアが半分開かれた正面入り口を抜けると、荘厳の気に包まれる。これまで見たソフィアのアレクサンダルネフスキー教会、セイネデリャ教会やヴァルナの聖母被昇天大聖堂を遙かに凌駕する格調の高さは、さすがブルガリア正教の精神的総本山に相応しい。

日ガイドによれば、正面のイコノスタシスは幅12メートルありバルカン半島最大級で、木彫の上に金箔が施されている。王門（イコノスタシス中央の門。王たるイエス・キリストの門を意味する）の両側に聖母子とキリストのイコンが掲げられていた。

イコノスタシスだけではなく、堂内の至る所が壁画により装飾され、見所豊富なはずだけれど集中できなかった。修道院に二泊し、入場料はなしだから、再訪や再々訪もできるだろうと、8分ばかりの滞在で取り敢えず退去する。

東門まで行き門越しに見える外の風景と、逆に外からの修道院など数枚を撮影し、先ほどの「立入禁止」札のある階段まで戻って回廊巡りを再開した。修道院などでしばしば見かける、一辺が40メートル程度のシンプルな回廊も好きだが、此処の回廊は規模も大きいし、中心に聖母教会があるので、それを経巡ることにより景観が変化するのを楽しむことができる。

教会の外から覗き撮影。これでもやはり規則違反だろうか。

回廊の2階南西辺からの眺望。

おまけというのもなんだけれど、さらに1階から4階まであるので、正に三次元的変化を堪能できるのだった。

二周目をゆるゆると歩んでいるとき、西門前の広場に団体が到着したらしく騒がしくなった。しばらくして中庭に続々入ってきた連中は、かなり距離があるにもかかわらず、中国語で話しているのが聞こえてくる。

回廊の4階南西辺からの聖母教会。

騒々しい面々が聖母教会の中に全員姿を消したとき、たまたま西門近くの階段にさしかかったので、広場に出てバスを見た。フロントグラス内側に、「臺灣寶樂旅行社」の文字が見えた。

修道院外に出たついでに、辺りを少しばかり逍遥してみた。広場の反対側にある土産物屋は営業していなかったが、建物に設けられたATMは動作中のようだ。取り敢えず現金の必要は無かったけれど、このような奥深い場所でもキャッシングが可能なことに感心したし、心強くも思う。

半時間足らずで台湾人達は去り、回廊周遊を再開する。結局1時間以上を修道院巡りに費やし、部屋へ戻った。ベッドに寝転がって天井を見ながら放心していると、なぜ昼にフランス人青年が、レストランの前で所在なさそうに渓流を見下ろしていたのかが判ったような気がする。

聖母教会は確かに素晴らしいし格調も高い。しかし一通り眺めるのにそれほど時間はかからず、それ以上は信仰的な情熱がなければ長くとどまる気になれないだろう。この修道院の見所としては、牛一頭を調理できる大鍋のある厨房や、ワイナリー、チーズ製造所、パン製造所などがあるらしいけれど、厨房の閉ざされたドアには修理中の貼り紙があり、その他もこの日は総て閉鎖されていた。博物館は有料なので忌避すると、一般観光客は2階以上の回廊には立ち入れないし、結局居場所を失ってしまったのだろう。日帰りだといっていたが、ソフィア行きのバスが出る3時までの間を、どのように過ごしたのか。改めて昼飯に誘えば良かったと思うのだった。

「隠れていた宇宙」などを読み、読書に倦むと修道院内を散策した。聖母教会は参拝者が少ないほど雰囲気が良い。そして台湾人一行の去った後に団体はなく、自家用車などで訪れる人も稀だった。

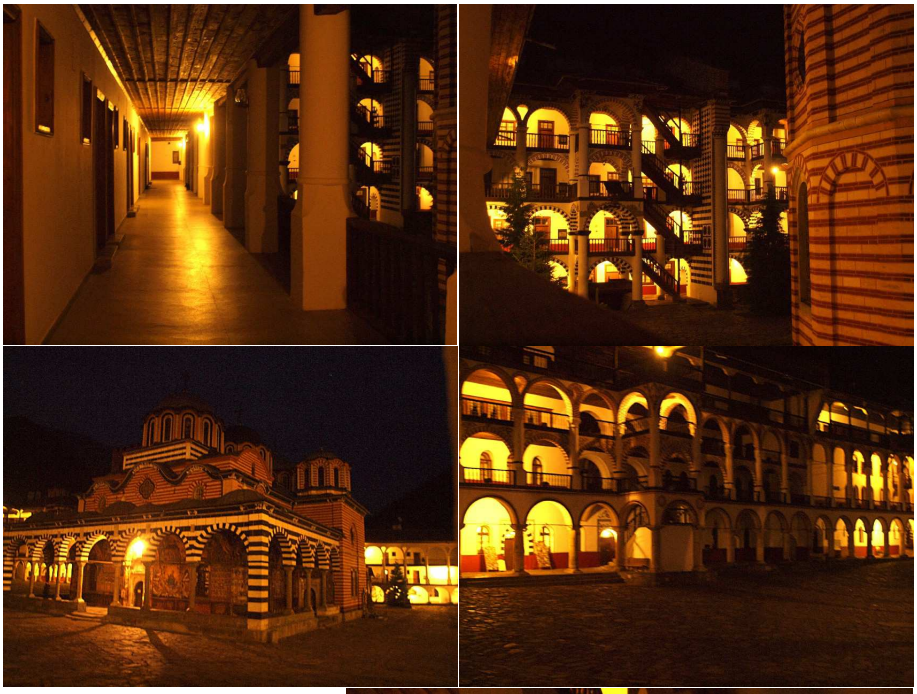
再び読書をしているときに、中庭の方から木を打ち合わせる乾いた音が響いてくる。飛び起きて部屋を出ると回廊から見下ろす。黒い僧衣に身を包み、黒髭を長く伸ばした修道士が、1.5メートルほどの木片を抱え、手に持った拍子木で叩いている。打ち鳴らしているのはシマンドロンと呼ばれる打楽器で、祈りの開始を告げているらしい。時計を見ると5時5分前だった。ちなみにかつてはこの修道院に300人の修道士がいたのに、現在では8人にまで減っているとの情報があるが未確認だ。

夕方の6時にリラ村経由のブラゴエフグラート行きバスが出るので、売店その他で働いていた人達が10名くらい西門へ足

名称	時刻の目安	記憶するテーマ
晩課(ばんか)	午後6:00	天地創造・陥罪・キリストの受難に際し血と水が流れたこと ・アリマフェヤのイオシフの記憶
晩堂課(ばんどうか)	午後9:00	睡眠前の痛悔・キリストの葬り
夜半課(やはんか)	午前0:00	最後の審判・ゲフシマニヤの祈り・キリストの逮捕(受難の始まり)
早課(そうか)	午前3:00	起床への感謝・神への讃美・ユダヤ人によるキリストに対する裁判
一時課(いちじか)	午前6:00	邦人(ピラト)によるキリストに対する裁判
三時課(さんじか)	午前9:00	聖霊降臨(せいれいこうりん)、ピラトの手洗い、キリストの茨の冠と鮮やかな衣
六時課(ろくじか)	正午	キリストの十字架刑、十字架上のキリスト
九時課(くじか)	午後3:00	キリストの死

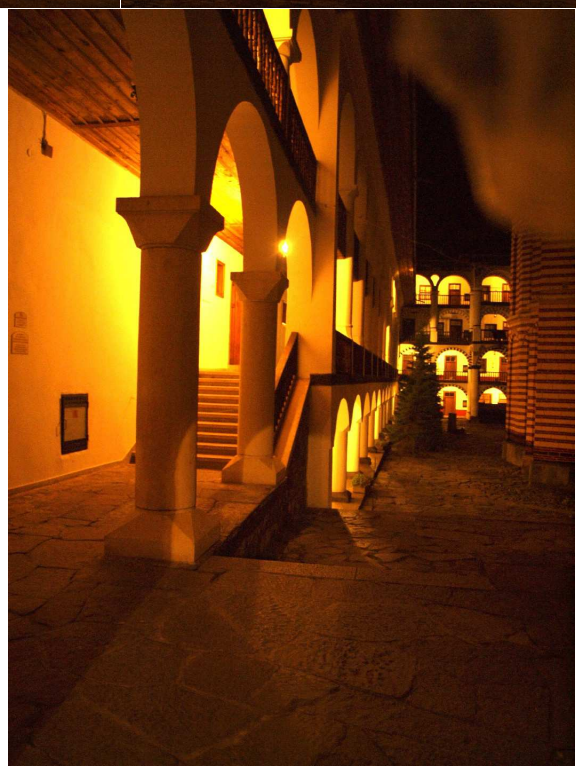
正教会における昼夜奉事一覧(ウィキペディアより)

を急がせる。これが下界へ通じる最終バスなので、他に宿泊者のいない今日、修道院内に世俗人は私一人と成る。これは実のところ嘘で、実際には夜勤の警備員が2名いた。しかし彼等は詰め所からほとんど出てこないので、気分としてはたった一人の世俗人だ。



修道院の夜景。

6時近くなり、晩酌を始める前にもう一度境内を回る。ほとんど人がいないはずなのに、回廊総てに灯りが点り、昼間よりもむしろ華やいだ景観を作っている。聖母教会には昼間いたオバサンの替わりに修道士が一人、売店兼監視所のなかにひっそりと坐っていた。イコノスタシスを前に佇むのはこの日三回目だが、見るたびに神聖さを増すように感じられるのは修道院の空間に心身の同化が進行したせいだろうか。しかしじっくり見ていると欠点も目立つ場合がある。気になったのはイコンの光背で、輝く馬蹄形は何やら陳腐に思えて仕方なかった。



一旦部屋へ戻り、空のペットボトルを携えて境内に設けられている吐水口から水を汲んだ。裏山の渓流から取水しているのだろう。中庭に四箇所ほどこんな吐水口が設けられている。聖水（？）で酒を割れば御利益があるかもしれない。

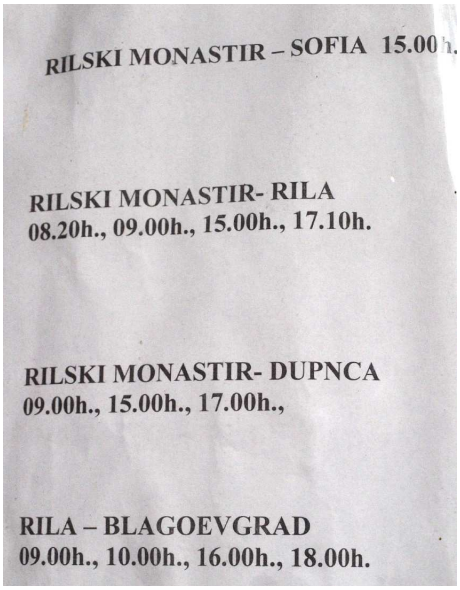
修道院で過ごした一日

明くる24日は6時に起床し、シマンドロンの音を聞き6時20分にまだ薄暗い表へ出る。気温は5℃だけれど風もなく寒さは感じない。聖母教会や修道院の東西門などはまだ閉ざされたままだ。6時半になると警備員が詰め所から姿を現し開門する。

6時半が此処での一時課なのか、修道院の一角から重厚な聖歌が聞こえてきた。聖母教会からではなく、北西棟から流れ出ているようだ。壁などの障害物により、くぐもったような響きになっているが、それもまたこの修道院にに合っているように感じられる。石畳の中庭に一人佇み、余人を交えず聴いているという感傷も相まって、しばらくは時が緩やかに過ぎるような思いがした。

境内を一回りして部屋へ戻る。読書で時を過ごし、8時になって西門前広場へ行く。明日、山を下るとき利用する、8時20分発バスの事前確認だ。ところが中庭を横切っている最中に、広場を廻って方向を変え、走り去るバスが見えた。

西門6時23分。



西門前広場に貼り出されていたバス時刻表。一番上がソフィア行きで二番目がリラ村行き、三番目はリラ村経由かと思われるが午後5時と5時10分があるのが理解できない。一番下はリラ村発ブラゴエヴグラド行きだが、9時の便は修道院発8時20分がそのまま継続して走った。

リラ食堂のオムレツ。ディルを髪に見立て、目玉は胡瓜で黒目はスパイス、鼻と口はトマトを利用していた。ブルガリアではこんなのが良くありなのだろうか？

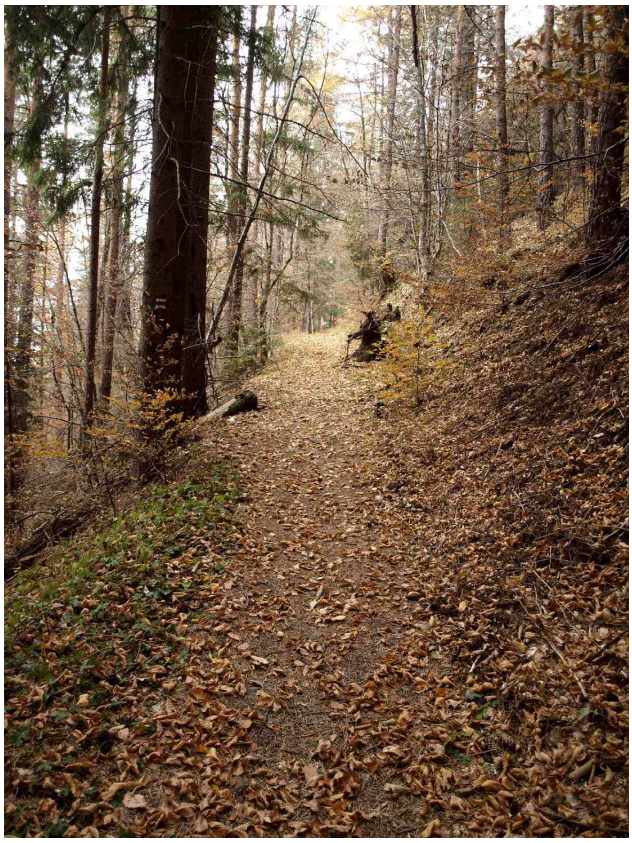
村から僧院関係者を運んで8時に着いたバスだが、通常これで村へ行く利用者などないため、定刻を待たずに発車したらしい。明日は8時前からバスを待った方が良さそうだ。

8時15分になってリラ食堂へ朝飯を食べに行った。何時に開店したのか判らないが、室内は既に充分暖まっていた。入ってすぐの部屋では地元のオヤジ達がコーヒーとタバコで談笑している。煙を避けて昨日昼食を摂った奥の部屋へ行くと、この朝も無人だったが暖炉の薪は気持ち良く燃えている。

朝食としてはオムレツができると云うことで、それとパンにスープも頼む。5分ほどでトーストされたパンと温かいスープ、さらに5分ほどしてオムレツも運ばれてきた。思わず笑ってしまったのは、人面オムレツだったためだ。ヴァルナのバスタオル犬（P.52）なども同類だが、このようなユーモア感覚がブルガリアの国民性なのか、一時の流行、ホテルや店の伝統、あるいは個人技のどれに相当するのか判定できないが、総合的にいうならば日本人とはちょっと異なる嗜好のようだ。しかし頬笑ましくも思う。

面白いオムレツであったが、味は普通で、これはスープも同様だった。最後はミルクコーヒーを飲み、勘定はスープ2.5Lv(137円)、パン0.6Lv(33円)、オムレツ5Lv(275円)、コーヒーはこれまでのようにミルクと別れていなかったが、レシートに印字されたキリル文字をグーグル翻訳してみると「ネスカフェ」の文言があった。朝は手抜きしてインスタントコーヒーで済ませているのだろうか？これの料金は1.5Lv(82円)だった。

一旦部屋へ戻り、10時に外出した。西門を出て広場の外れから未舗装の山道を登る。修道院の由緒を辿れば、聖イヴァン・リルスキ（正教会で列聖。カトリックでは列聖されていない）が山中に籠もり神に仕えていたとき、教えを請うて訪れた人々が建設したのだから、山野の方がより神聖さが高いともいえよう。しかし宗教には無縁なので神聖はどうでも良く、それよりも穏やかに紅葉した山路を辿ることが気持ち良かった。



山道。

径は良く整備されているので、歩きやすいし安全だ。しかしガイドブックや地形図なしなのであまり遠くまで行く気にはなれなかった。ところどころに道標も設置されているが、キリル文字だし、示されているだろう地名などを参照する資料がないのでお手上げだ。結局誰一人とも会わぬまま、登り口から2.4キロ地点に半時間かけて到達後、踵を返す。

上左：修道院北側を迂回する道路に設けられた石積擁壁。わざわざアーチを組んで銃眼のような開口部を作っているが、なぜそんな面倒なことをするのか判らなかった。上右：大型消防自動車。修道院のために特別配備しているのか。
下：修道院北東側に建設中の建物。リゾート施設だろうか。

西門前広場に戻ったのは12時、修道院の北側外周に沿って歩いてみた。1階の窓は極端に小さく、角に配された四角い塔には銃眼が設けられ、日ガイドに、「中世都市を囲む城壁さながらの頑強な高い石壁で囲まれた建物」の記述は確かにその通りだ。しかし近代以前の修道院ならばどこも似たようなもので、要塞の機能を備えていたはずで、此処が特別頑強なわけではないと思う。

この日飲んだ白ワイン。

修道院の自室へ戻り、デイパックを下ろしてトイレに入ったりする。カメラだけを持ってリラ食堂へ向かった。昨日に続き今朝も利用しているから、気分はすっかり常連客だ。ちなみにウェイターは同じオヤジだった。朝早くから深夜までの超長時間勤務になるが、家族経営らしき店なので適当に折り合いを付けているのだろう。

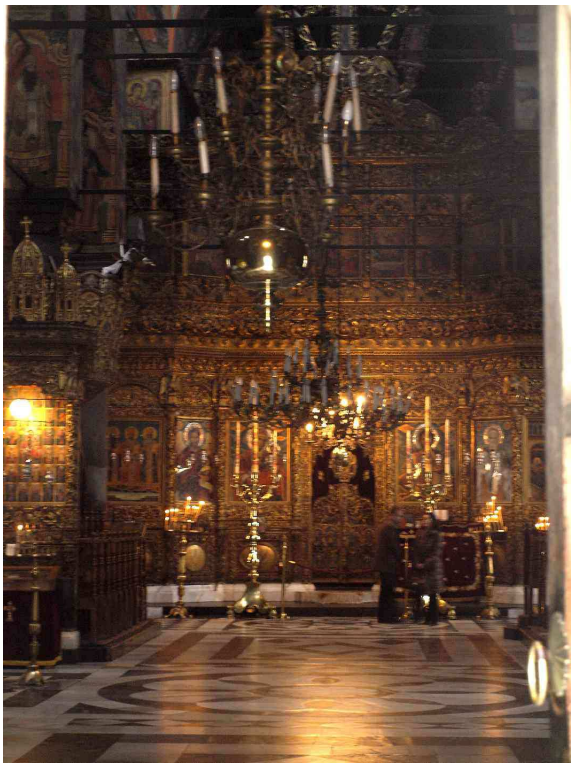
昨日と同じテーブルに着き、一応メニューを拡げる。しかしこの日食べるつもりだったのは、英ガイドに Rila's local delicacy is pasturvka (trout) と紹介されていたマス（内陸部だからブラウントラウト？）だった。これをメインにして、サラダはペッパー、ワインはゴールデン・リスムの白を一本。このワインもポモリエ産だった。

「名物に美味いものなし。」が正しいかどうかはさておき、マスは大外れだった。運ばれてきたものを一目見ただけで期待は雲散霧消した。それでもともかく食べてみようと、わざわざ魚のために部屋から持ってきた箸を入れる。身に締まりがないなと思いつつ口に運ぶと、内側が冷たい。冷凍物を中途半端に加熱しただけで持ってきたようだ。

食通ならばこの辺りで憤然と席を立つのか、ウェイターを呼んで、「食べてみろ！」と云うのかもしれない。しかし食通でないどころか、何でも食べてしまう方だし、かててくわえてこの食堂を出ると（多分）数キロ歩かなければ他の飯屋はない。ペッパーサラダが普通の出来で、ワインが美味かったのが救いだった。

食事の終わりはアイリャンにしてみた。トルコ起源の飲み物で、ヨーグルトと塩、水を混ぜたも

上：ペッパーサラダ。下：マス。



中庭を散歩していると、聖母教会の正面入り口扉が観音開きに両方とも開かれていた。イコノスタシスを外から覗き撮り。

のだ。トルコではアイランと呼ぶがこちらのものは若干塩味が薄いような気もする。しかし最後にアイランを飲んだのは14年も前の話だから、全く当てにならない。

勘定は、ワイン20Lv(1,098円)、サラダ4.5Lv(247円)、パン0.4Lv(22円)、マス10Lv(549円)、アイリャン1.5Lv(82円)だった。

修道院へ戻り、以後は遠出する気にもならず、読書や中庭の散歩に時を過ごした。4時になって修道院の博物館が4時半で閉まることに気付いた。明日は早出するから、見るならば残されているのは半時間のみだ。博物館は好まないけれど、ガイドブックなどは、「必見」みたいな紹介をしている。ラファイルの十字架には興味をそそられた。

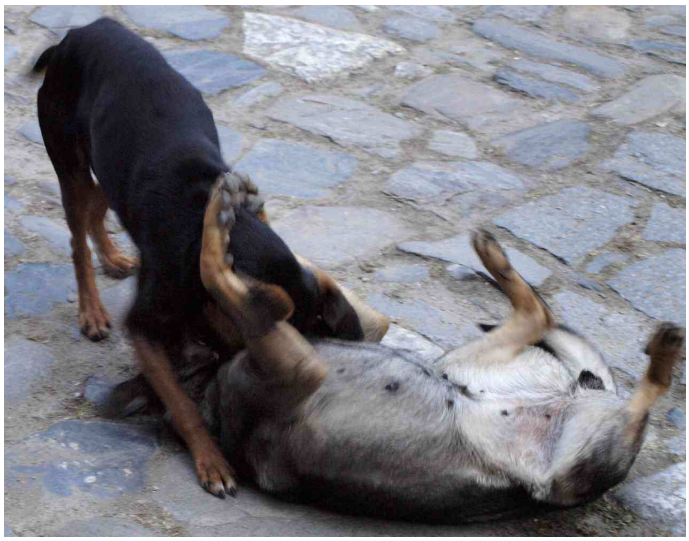
入ってすぐのカウンターで8Lv(439円)の入場料を支払う。昨日は宿泊窓口のことで世話になったので、何となく親近感があったし、向こうも覚えているようだ。博物館は地下、地上の各1階でそれほど広いものではない。陳列されているのは寄贈品やイコンなどで、それぞれ価値あるものとは思うけれども、見ていてさっぱり面白くなかった。予想していたことだから気落ちもしないけれど、ほとんど素通りに近く歩みを進める。

ラファイルの十字架。

順路の最終部分にラファイルの十字架が四面ガラス張りのケースに入って展示されていた。修道士ラファイルが針のような細い刃物と拡大鏡を使い、12年を費やし作り上げたという。高さ81cm、幅43cmの十字架に、聖書に基づく104の場面、650人の人物が彫られているそうだ。何しろ細かい。しかしその素晴らしさに圧倒されるよりも、あまりの細密さに辟易したのが本音だ。

倍率の高い拡大鏡を片手に、至近距離から十字架を仔細に見れば良いと思うのかもしれない。しかし40センチほどの距離からガラス越しに見ると、老眼の疲れ目は眼鏡を使用しても霞む細部に疲れるばかりだ。日ガイドに、「壁に張(ママ)ってある六十倍の拡大写真でやっと何の場面かが分かるくらいである。」とあるが正にその通りで、それを素晴らしいと感じる人が多いのだろうが、私は疲労感が先だった。

結局博物館で見て良かったと思うものはなかった。博物館と限らず、修道院全体でも同じ事がいえそうだ。しかしそれでも二泊して良かったと思う。今回の旅で一番素晴らしかったとも云えそうだ。部屋で中庭から流れてくるシマンドロンの響きに耳を傾けたり、視線を窓外に向けて黄昏時にリラ食堂に点る灯を眺めたりしながら、ゆっくりと時が過ぎて行く、その感じが堪らなく愛おしかった。



野良犬がじゃれ合っている。どちらも体重が20キロを越えていそうな大型犬だ。境内はペット連れ込み禁止だが、野良犬はお構いなし。しかし警備員が邪魔にして蹴飛ばしたりもしていた。